

「社会の中の身体」

山本泰

「ぼくたちは肉体をなくして意志だけで生きている」と 60年代に吉本隆明が詠んだ時代の閉塞感は既に過去のものであるとしても、「ぼくたちは肉体をなくして・・・」という状況は別の意味でさらに顕著になってきている。

●身体の主題化

たしかに昨今の世の中はフィットネスブームや健康ブームで、体のことを「考えている」人やそのためにお金を費やしている人は多い。他方、就職の面接では、目線の使い方やお辞儀の仕方まで、事細かなマニュアルがあつて、これも立派にマニュアル文化の一部をなしている。そう思いながら、電車に乗っていると、今月のアンアンの特集は、「愛され体質になる技術」だそう。



この10年ほどの、こうした身体の主題化が、豊かな身体文化を生み出したかというところではない。

●まずい身体

こういう傾向が特に顕著な日本で、(金がものを言うように)、カラダがものを言うようになってきたかというとその逆で、(体格の向上があつたのかなかったのかは別として)、カラダはますます貧相で、存在感のないものになっている。依然として、あるいは一層、力を持っているのは、頭脳であつて、カラダは、アタマが支配する社会戦略の操作対象、動員資源にすぎないのではないか？

アタマの世界は、ますます抽象的になり、恋愛はもとより家族もゲームなら、会社も人生もゲームとして解釈される。これはテレビゲームと同じ抽象化された世界であつて、「リアリティがない」と当事者が不平を言うほどである。

非常に極端なリアリティの2極化、ひとつは肉としての身体、もう一つは抽象的な主体としての人間、が進んだ。

●間身体性

実は社会学もこの100年、そういう抽象化と無縁ではなく、行動主義、主知主義(構成主義)、システム論と立場は様々ではあつても、人間の相互行為の具体性からますますかけ離れてきたと言える。例えば、家族とは、「同じ屋根の下に暮らして、同じ釜の飯を食う」というように、身体が共在することの意味は大きいはずなのだが、「ともにある」ことが成員間の<関係>をどう形成するか

に、残念ながら無知である。家族は人類の普遍と言われるが、たしかなのは、人間が身体でなかったら、家族は決して普遍ではなかつたであろうということだ。

主体が身体であることの最大の意味は、それが今ここに局在することである。

知覚について言えば、私が身体としてある場所を占めているからこそ見える世界が開け、当然、見えない部分(陰)があり、だからこそ、知覚の世界は立体的である。それと同じように、私たちは、言葉であれ、所作であれ、身体という媒介を通して、他者と場を共有している。そうした間身体性の力の働きをきちんと理解する必要がある。そしてそれがどう働いているのか、それをどうしたらもっとよく働かせることができるのかを考える必要がある。

●豊かな身体文化のために

間身体性の力の働きは、日常の世界でも、学問の世界でも同じことで、例えば、社会調査はデータ収集ではなく、自分とは異なる生活環境にある人のもとに何度も足を運んだ上で、どうしたら相手を理解できるのかを、相手と向き合う態度や言葉を生み出す作業のことである。

人間の世界は、<からだ><ことば><ところ>の3つを切り離すことはできない。しかし、その基本は、からだで学ぶ/からだを学ぶことにあつてと思う。21世紀という超情報化社会にあつてこそ、人間文化の根本に立ち返つて具体としての身体を再発見すること、そのような発見の手続きを教育の中にどう取り込むかが重要である。

(大学院国際社会科学専攻：社会学)